

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531112

研究課題名(和文)近代日本における高等女学校と中学校との教科書比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of Middle Schools and Girls' Middle Schools in Modern Japan

研究代表者

近藤 裕幸(KONDO, Hiroyuki)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40583422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高等女学校と旧制中学校の地理科教科書における教科書記述内容の量的差異と質的差異を検討することで、戦前の地理科教科書における性差の特徴を明らかにすることにある。

結果以下のことがわかった。(1)中学校用教科書と比べると、女学校用教科書は量的に少なく、羅列的記述になる傾向がある。(2)日本地理教科書および地理学通論の表現内容には女学校用教科書特有な表現はそれほどみられないが、外国地理の教科書においては多くみられた。(3)歴史教科書では、日本の歴史における女性の貢献、当時の服装に関する表現がみられ、地理科教科書では住民や風俗の面が重視され、両者の違いが見られた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the character of gender differences in geographic textbooks by verifying the differences in quantity of contents in textbooks between old system junior high school and girl's high school, and examining the female specific expression qualitatively in geographic textbooks.

Thus, the author came to the conclusion as below; (1) The textbooks for girl's high school are intended to be less for quantity and to be enumerating compared with for junior high. (2) The female specific expressions are found not much in Japanese Regional Geography textbooks but in Foreign Regional Geography ones. (3) We can find the differences by way of describing women's patriotism and garb in history, and considering the phases of residential manners and customs in geography.

研究分野：社会科教育、地理教育

キーワード：教科書 高等女学校 旧制中学校 地理科 性差

1. 研究開始当初の背景

わが国における教育史研究では、初等教育史・中等教育史・高等教育史などのジャンルがみられるが、男女の性差に伴う教育史上の論考は 1990 年に入ってからといわれ、研究の蓄積は乏しいといえる。申請者はこれまで旧制中学校（以下 中学校）の地理科における制度や教授内容についてその特徴を解明したものの（近藤 2007a）、高等女学校においては制度変遷の解明にとどまっていた（近藤 2007b）。そのため、制度が具現化したとみられる高等女学校地理科教科書の検討が課題となっていた。

2. 研究の目的

目的は、高等女学校における地理教授制度変遷の論考をうけて、高等女学校と中学校の地理科教科書における教科書記述内容の量的差異を明確にし、さらに質的差異も明確にすることで、そこにみられる男女差の様相と、その原因を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

対象は、高等女学校と中学校の地理科教科書である。1945 年以前は高等女学校と中学校の地理科教科書は、「日本地理」、「外国地理」、「地理学通論（地文学）」に分かれていた。戦前に発行された地理科の教科書は、高等女学校は 237 冊、中学校は 201 冊である。そのうち、著者が同一である教科書で、かつ初版訂正版に関わらず発行年の差を 3 年以内のものに限定した。これにより、著者の執筆意図の違いを対比できると考えたためである。その結果、本稿で対象となった教科書は日本地理が 24 冊、外国地理が 26 冊、地理学通論が 17 冊になった。

方法は、まず高等女学校と中学校の地理科教科書頁数の量的差異を明確にした後、特に女学校用教科書特有な表現等を抽出し、その内容を検討する。女学校用教科書特有な表現

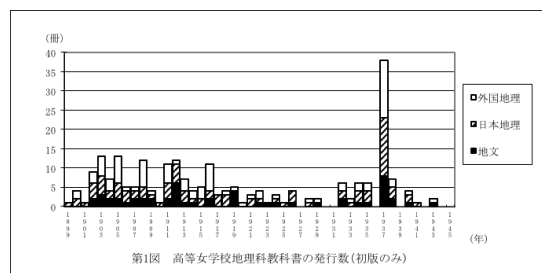
とは、中学校教科書には見られず高等女学校教科書のみみにみられる表現で、具体的には「女子は・・・」、「女子たるものは・・・」と表される文章や、女子だけの写真・絵等を指す。この量的、質的な差異に対する分析を二つの軸として、日本地理・外国地理・地理学通論教科書のそれぞれの傾向を捉え、さらに歴史科教科書と比較することによって、地理科教科書における性差の特徴を導出する。

4. 研究成果

（1）高等女学校地理科教科書発行の概要

明治初期から昭和前期における女学校地理科の教科書は、初版に限定すると 230 冊あり、中学校のものは 497 冊であった。その内訳は、女学校用の場合は日本地理が 91 冊、外国地理が 86 冊、地理学通論が 53 冊であり、中学校用の場合は日本地理が 201 冊、外国地理が 185 冊、地理学通論が 111 冊であった。

著作者には西田與四郎、山崎直方、小川琢治、石橋五郎、田中啓爾ら著名な地理学研究者がいて、彼らは女学校用のみならず、中学校や実業学校用の教科書も著していた。



第 1 図は、女学校地理科教科書の発行冊数（初版のみ）である。1937 年が突出して伸びている理由は、1937 年になされた「高等女学校及実科高等女学校教授要目中改正」において、地理科の目的が以下のように設定されたためである。この改正によって今まで以上に国民精神の涵養が強く求められるとともに、地理科の教授目標もかえられた。つまり、それまで女学校地理科においては地人相関の考えがみられなかったのだが、ここでとりいれられることにもなったため、発行数が

突出した。

(2) 日本地理教科書について

女学校と中学校用の日本地理教科書では、女学校の教科書が量的に少なく文章が簡潔になる傾向が強い。詳細で丁寧な地理的な考え方を導く記述が中学校よりも少ないことと、自然と人文現象とを関連づけない説明によって文章の量が減るため、女学校用の教科書のページ数が少なくなっていると言えます。

また、女学校用の日本地理の教科書には女学校用教科書特有な表現、つまり「女性だから」、「女性とは」といった内容はほとんどみられないものの、1940年頃の教科書から女性が活躍している写真が掲載され始めていることがわかった。

(3) 外国地理教科書

外国地理の教科書では、頁数において男女差がみられ、それは内容にも反映していた。つまり、自然と人文現象を関連づける、いわゆる地人相関的な記述内容が男子にはみられ、それによって頁数が増えていたのである。女学校用の教科書は中学校のそれと比べると羅列的記載になる傾向がみられた。この傾向は日本地理の教科書と同じであった。

その一方で、外国地理教科書では、日本地理の教科書とは異なり、女学校用教科書特有な挿図や文章がみられ、男女差がみられる教科書もみられた。特に石橋五郎の教科書においてはその傾向が顕著であった。

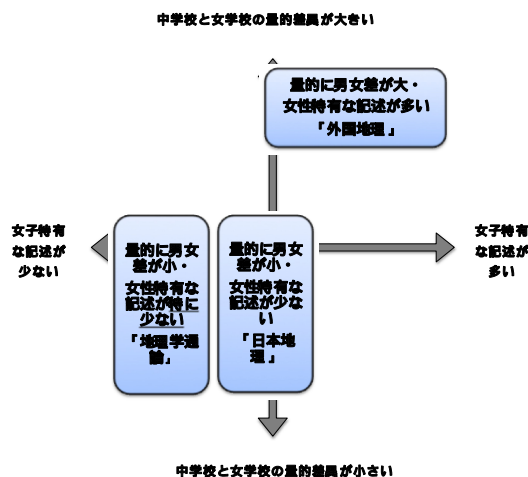
(4) 地理学通論の教科書

地理学通論教科書においては、女学校用と中学校用教科書では、男女差が量的にほとんどみられない。男女によって異なった記述内容も若干はみられるものの、先述した外国地理のように文化に対する見解を反映する余地があまりなく、内容も自然科学の要素が強いためこのような記述内容になったと考えるのが妥当であろう。

(5) 日本地理・外国地理・地理学通論教科

書の全体的傾向

これまでの分析を図化したものが第2図である。



第2図 日本地理・外国地理・地理学通論教科書の比較(筆者作成)

量的差異つまり頁数の差は、女学校用教科書の頁数が、中学校用のそれより通常少ない。その理由は、高等女学校では家事に関する教科が教科課程の中で一定程度占めているため、一般教養の科目は少なめに抑えられているため、このことは女子には男子よりも深い内容は求められなかったことを示す。減らされた内容は、一つには中学校教科書には見られる細かな記述であり、もう一つは自然と人文現象を関連づけるという地理学特有な視点にかかわる記述である。女学校の教科書では、そうした自然と人文現象の関連を説明する説明文がなくなることによって、単に地名と物産が羅列することとなった。

女学校用教科書特有な表現は「日本地理」と「地理学通論」ではさほどみられず、「外国地理」においては顕著にみられた。地理学通論の教科書では、自然科学的な内容が多いため、特に外国地理のような他国の女性に対する記述は少なくなったとみられる。

(6) まとめ

女学校用教科書の著者として、山崎直方、小川琢治、三省堂編輯所、西田興四郎、田中啓爾といった中学校用教科書を書いた人々関わっていた。これにより、男女の教科書

内容の比較が可能になった。

女学校用教科書と中学校用のそれとを比べると、一般に女学校用教科書は量的に少ない。中学校用教科書では女学校のそれよりも地名をはじめとする情報が多く載っていたからである。加えて、中学校用教科書では地名と物産を羅列するだけでなく、その両者の関係性について説明されることが多く、結果として分量が多くなっていった。つまり、女学校用教科書では自然と人文現象を関連させる記述内容が、中学校のものに比べて少なく、結果的に地名と物産が羅列的に記述されることになってしまった。

さらに、女学校用教科書特有な内容もみられた。教科書を種類別にみると、日本地理教科書および地理学通論の教科書には女学校用教科書特有な表現はほとんどみられ認められないが、外国地理教科書においてはそれが多くみられた。ときには偏見とまでいえる表現すらあった。また、その当時の女子の位置づけも垣間見えた。例えば、高等女学校の教科書には「女子は...」、「女子たるもの...」という文章がみられる一方で、中学校の教科書には「男子は...」、「男子たるもの...」という書き方は一切みられず、「国民」という表現になっている。それは男子が国民であって、女子は男子とは同格ではないことを示唆している。

このように明治期から昭和前期の女学校と中学校の地理科教科書において、量的および質的な面において性差が認められるのである。

本研究の意義は、まず、女子教育における教科書記述内容を分析し、男子との違いについて質的量的側面から明確にでき、これまで地理教育史研究におけるの欠落部分を補うことができたことである。次に、地理教育にみられる性差、ひいては教育上における性差について、歴史との比較を通して明らかに

でき、地理教育の教育上の位置について新たな知見をもたらすことができたことである。

今後の展望としては、中学校・高等女学校の教科書についての分析は済んだので、今後は実業学校の地理科教科書についてとりあげその特徴を分析したいと考えている。これによって、中等教育段階における地理科教授および教科書の全容を知ることができ、教育史研究の欠落した部分を補うことになると思われる。

引用文献

近藤裕幸(2007a): わが国の教科書検定制度下における旧制中学校地理教科書の多様性. 人文地理, 59-5, pp.22-35

近藤裕幸(2007b): 高等女学校における地理教育制度史の基礎研究 地人相関的方法論の導入をめぐる. 社会科教育研究, 102, pp.1-13.

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

近藤裕幸, 高等女学校と中学校の地理科教科書にみられる性差, 日本地理教育学会, 2014年8月10日, 横浜国立大学(神奈川県横浜市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 裕幸 (KONDO, Hiroyuki)

愛知教育大学 准教授

研究者番号: 40583422